

をかしみを示したものであるが、狂言二百番すべては、是れ鎌倉足利時代の言葉で、今日時代小説を書く人、時代劇を作る人には絶好の参考であることはいふまでもない。唯文學として其價值謠曲には及ぶまいが、これも今日より見れば、一種のクラシックとして宜しく保存し、尊重すべきものに違ない。

(なわり)

人形淨瑠璃の今昔

水谷 不倒

近頃大阪の音楽座では、攝津の新口村で大當りを取つてをるといふ。それにつき友人よりの書信に、「今回攝津が新口村を語りて當りを取つてゐるのは、現今の人形淨瑠璃が、なほ依然として昔の名残をとゞ

め、繁榮を維持してゐると見るは大きな間違である。攝津の名聲も近來は漸く墜ち、といふよりも文樂の太夫、三味線、人形遣ひ凡て過渡時代の名人上手の多くが世を去り、ひとり陥止つてゐるのは攝津大塚で、文樂の人氣は實に此の太夫一人で持つてゐるのだが、おひく無人となつて座が淋しく、一昨年來入りも減じ、興行も一ヶ月以上續けたことは稀であつたが、今回は久しぶりに當つて結構である。攝津の藝は或意味でいへば、今いづれも一世一代の語物で、不祥をいふやうだが、もし今日聞いて置ねば、再び同じ外題を聞くことが出来ぬかもしれぬといふやうな心配から聞くので、恰も三四年前まだ團十郎在世の時に、其の型を残すとしていろくの役を勤めたとがあるが、それを後學の爲に見て置ると云て出掛けたのと同じ趣がある。殊に此の新口村は、攝津が聲ばかりで語つてゐるうちは左程に賞美せられなかつたが、老後音聲が減じて飽かなくなつて上手で語

るやうになり、はじめて孫右衛門の眞を寫すとが出來たとの評があり、一方には近松研究者がふえて、

よし原作
その儘て
なくとも

これを

「廓文庫」

と「紙治」

など、紋

十郎の手

摺に、昔

しの辰松

を懐ひて

竹豊の全

盛を忍ぶなど嬉しがる連中も多く、大阪に勿論のと

京都廻りより月參りをする好事家もあればその筈で

ある」と云て寄越たが、實にその通りで、攝津大塚が

今や人氣では繁昌せず、或意味で大入を取つてゐると聞いては、人形淨瑠璃の運命も頗る不安になつて

來た。

遠き昔

は姑く

措いて

こゝ五

六年に

於る、

文樂座

の變動

を見

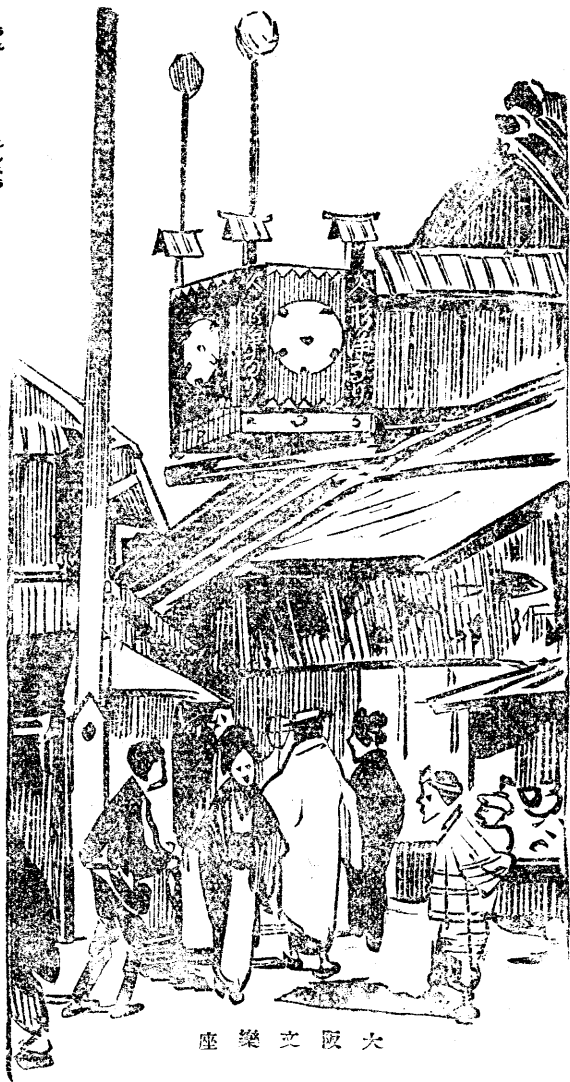
も、い

かに斯

座

に於る太夫、三味線、人形遣の重なる顔觸はどうか

といへば、實に左の人々であつた。



大阪文樂座

太夫 竹本越路太夫 (今の攝津)
 豊竹 呂太夫

三味線 豊澤 廣作
 野澤 吉兵衛

人形遣 桐竹 紋十郎
 吉田 玉助

先づこれが當時の主腦で、玉助を除くの外いづれも老人株で、其のうち越路、廣助、玉造の三人が櫓下の地位を占め、これに次いで、太夫では染太夫、文字太夫(今の越路)南部太夫等があり、三味線では吉彌、勝鳳、猿糸あれば人形に多爲造、玉治など兎も角上手が揃つてをつた。又其の頃は堀江にも明樂座で人形淨瑠璃を興行してゐて、こゝには大隅、組、住等がゐる三味線に叶(今の清六)仙左衛門、人形に清十郎、兵吉などいふ顔觸で、萬事及ばないまでも文樂に拮抗し、操芝居も既に末連には傾いてゐたが

まだくそれでも全盛のほとぼりがあるやうに思はれたが、僅二三年の間に、或は世を去り或は退隠して、其の過半は姿を隠して了つた。

即ち調子は一本であつたが、淨るりの大きい點に於て、ヤハリ昔しの太夫、明治仕込の太夫には、到底望むべからざる妙味を有してゐた呂太夫が、其の後間もなく病氣で退いて、其の代りに大隅を明樂座より文樂へ移したはよけれど、これが爲に明樂座は首領を失つて瓦解し、清十郎組太夫等次いで世を去り他は四方に離散して、文樂の獨占となり、三十六年に攝津の改名披露に滿都の人氣を集めたは、實に棹尾の盛況であつた。されどこれも暫時のどて、やがて文樂には廣助が死に、其の高弟の廣作が名は襲いだけれども、技藝は師に及ばざると遠く三味線では吉兵衛ひとり其の估券を保つたけれども、野澤派の勢力豊澤に及ばずして、櫓下に据る一事に至り苦情を生じ、吉兵衛は憤然名譽ある攝津の絲を辭して東

京に歸つたのは、世人のいたく惜んだところで、吉兵衛は其の後病氣で退いたが、しかし同人を故なく去らしためたのは、文樂の失態といはねばならぬ。更に人形遣の棟梁玉造の世を去るに及んで、文樂の名物男は攝津と紋十郎を殘すのみで其の餘は大概失つて了つた。つまり今日では、攝津と紋十郎との人氣で維持してゐるやうなもの。殊に人形淨瑠璃は、とうど能樂と同じく最早發達の餘地なく、唯保存するにとゞまつてゐれば、過度時代の名人のあるうちは、兎も角其の命脈を繋ぐとも出來やうが、これら名人の去つた後は、劇界にて青年俳優を養成し得る如く、今後太夫、三味線、人形遣等にも後繼者を作るとが出來るかといへば、それは寧ろ望みなきこと、いはねばならぬ。されば人形淨瑠璃の運命も、實はこゝ數年、攝津、紋十郎等の在る間で、攝津にして一朝退隱てすれば、紋十郎の藝も遂に施す所がなくなる。劇界には團菊左を失つてから、近頃また老優頻りと

世を去つて、松助、片市等數人を殘すのみで、頗る心細い次第であるが、しかし演劇はいくらも發展すべき餘地があれば、たとへ團十郎菊五郎式の名優は出ぬまでも、その新しき方面に新しき天才を得るとは、強ち難いともなからう。けれども既に發達の望みなく古き型を卜守するのみの藝、即ち能樂の如き、人形淨瑠璃の如きは、今後有爲の人物を招致すると頗る困難なれば、現存の名人一人を失なへば、それだけ缺損を生じて、補充の道がつかぬといふ始末である。近日また常磐津林中の計に接し、前齒を失つて唇の寒いやうな心地 いよ／＼人形淨瑠璃の將來が氣遣はれるやうになつた。

(なにも)

